

渡辺啓助探偵小説選Ⅱ
目次

創作篇

姿なき花婿 ^{アメリシスト}	2
紫水晶の女 ^{アメシスト}	15
焼跡の悪魔達.....	31
窓辺に天使ありき.....	43
黒猫館の秘密.....	55
密室のヴェイナス.....	69
吸血劇場.....	100
浴場殺人事件.....	164
黒い扇を持つ女.....	181
モンゴル怪猫伝.....	221
シミーズの中味.....	243
女王の浴室.....	255
水着ひらめく.....	273
肉体定価表.....	286
美しき尻の物語.....	298
黒い天使の寝台.....	313
女レスリング奇譚.....	330

弟ワタナベオンの想ひ出	348
薔薇雑記	351
【新版】薔薇雑記	367
探偵小説文学論	379
五〇年度の回想と五一年度への展望（幹事へのアンケート）	380
亡弟温の「影」	381
忘れがたき一夜	382
明るく楽しい海野氏	384
わが創作法	385
論争ものとスリラー	389
『探偵小説四十年』	391
推理小説とともに	392
渡辺温のこと	394
卷末エッセイ 父と私の洪川の思い出	398
渡辺東	398
【編者解題】 小松史生子	400

凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」(昭和六一年七月一日内閣告示第一号)にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

創作篇

姿なき花婿

1

「あらッ——こんな知らないわ」

彼女は、思わず、ひとりごとを洩らしてしまった。それも無理はない。

糸賀杏子は、いくら考えてみても、こんな小包を受取る心当りは全然なかったのである。

「不思議だわ——」

しかし、宛名は、まぎれもなく、糸賀杏子だし、所番地にしても一字の誤りもなく明瞭な楷書でしたためである——「田中タキ方」と、杏子がおタキ小母さんの間借人であることまで承知している小包差出人だが、それが、いつこう、杏子には、見当がつかない。熊野熊吉なる名前も、ぜんぜん知らないし、それが、なんとなく、いい

かげんな変名のような感じもしてくるのである。

それが、誤配でないことは、もはや、疑う余地はないが、しかし杏子はすぐそれをあけてみる気にはなれなかった。

薄気味わるかった。

熊野熊吉なる人物が、なにか重大な思いがいをしているにちがいない。縁もユカリもない杏子に、この小包を送ったことの間違いに気がついて、あわてて取り戻しにくるかも知れない——それを想うと、開けるのが躊躇されるのだ。

「そりア、ね——きつと、プレゼントだよ、ほら——クリスマス・プレゼントってのがあるじゃないか、——あれに違いないよ」

これが階下の小母さんの推定だ。——小母さんは五十六だが、時節柄、プレゼントぐらいの英語は小耳に挟んでいるのだ。

「誰からのプレゼントよ、——クリスマスの贈物をくれるようなひと——ちよッと心当りがいいわ」

杏子は、郵便局に勤めていて、僅かな給料で、つつましく暮している娘だ。プレゼントしたり、されたりするような派手なお嬢さんの空気は知らない。

局に勤めている彼女の同僚だって、みな似たりよった

りで、いずれもプレゼントだなんて柄でない。Xマスカード一枚うかつに買えない人たちの集団である。

だいいち、熊野熊吉だなんて男のひと、聞いたこともないし、熊野熊吉という変てこな名前そのものが、サンタ・クロースを連想させるものを、まるで含んでいないし……

その夜、杏子は、小包のことで頭が一パイだった。不気味で、得体が知れないけれど、まさか、原子爆弾のプレゼントではなさそうだし、重さを計ってみたり、包装紙をさすってみたり、……不気味、不可解なうちに、何か、ほのかに暖いものが、手ひらに浸みこんでくるような感じもして、……しかし、結局、彼女はあけてはみなかった。たいていの娘なら、宛名が自分になっているのだから、差出人が誰であろうと、すぐさま開けてみるにちがいない。

杏子は、しかし開けなかった。あける前に局でも一度しらべてもらおうと思いついたからだ。

小包の消印^{スタンプ}を見ると、驚いたことに、それは自分たちの局で受けとったものである。

どんな人がその小包を、窓口で差しだしたんだろう——小包の掛りは、堀口さんである。彼は、小包だの速達などを取り扱う窓口に、陣どっている男の局長だ。

ひよつとすると、——この小包を差出したその男——男かなんか、それさえもハッキリしないわけだが、堀口さんは窓口で当然小包の男を見かけたはずだ。見かけたことは、もちろん見かけたにちがいないが、忙しい最中だと、よほど印象的な相手でないかぎり、記憶に残らないことのほうが多い。

杏子は、翌朝、出勤するや否や、堀口さんをつかまえて、昨日の小包のことを訊いてみた。

「待て、待て——じゃ、それは、おとついの午前中受付けたわけなんだが——さアどんなひとだったかな、普通？ 書留？——書留かい——そんなら、おぼえてもいいはずだ。糸賀杏子——そうだ。そういう字は書いたよ——書いた憶えはあるよ。糸賀杏子か——なるほど、それがあなたの名前だったことは知り過ぎてるくらい知ってるくせに、忙しい時って、可笑^{おか}しなもんだね。ただ機械的に書いてるだけで、その名前の本人が、ひとつ屋根の下で仕事することなんか、ちツとも思い出さなかったんだから、——ただ縁もユカリもない人間の名前として、事務的に走りがきただけなんだから、——憶いだしていたら、そりゃ、もちろん、相手をとくと見さだめておいたはずさ——えエ——と」

堀口さんは、混とんとした記憶のなかをあれこれと探

つてる様子だったが、――

「あの人がな――あの人が熊野熊吉氏であったかも知れないよ」

「あの人がって？――」杏子は、もどかしがった。

「あのひとは、とても美男子だった――杏子さんのいいな、ずけによく似た……」

杏子はクルリと背なかをむけて、自席にもどった。

堀口さんは、ときどき、真顔で、ひとを担ぐ癖があるから嫌いだ……

局を退けてから、杏子は小包の差出人の住所を、（それ信用していいか、どうか怪しいもんだけれど）しらべしてみる気になった。町名や番地は、すくなくとも字面^{じづら}だけは、ちゃんと実在しているものであった。

その住宅区の一画は、たいして遠くもなかったので、杏子も自然足が向いたのである。

大森区もこの辺は、とりわけ閑静な住宅区で、空襲の被害も目立つほどではなく、戦前と、ほとんど変わっていなかった。

夕ぐれ時で、ここかしこに灯が入り、手入れの行きとどいた庭木ごしに、明るくて裕福そうな内側の様子などもチラチラとうかがわれ、総じて、このへんは、生活苦

などあまり知らない階級の住宅が多いことが、歩いてるうちに、ひとりりでわかってきた。政府の高官とか、会社の重役とか――表札の中には杏子が、新聞などで見かけるような有名人の名も見出された。

しかし、熊野熊吉なんて表札はどこにも見当らなかつた。小包の差出人の住所は、書いてある町番地と一致しても、差出人の名とは一致しなかつた。

表札に出ていないのは、熊野氏が同居人であるせいかもしれない、附近に町会事務所があつたので、きいてみたが、「へエー、クマノクマキチさんですか――いっぺん聞くと忘れない名前だが、当町内には、そういう名前の転入者はありませんね」と、まったく、取りつく島もない事務員の返事だつた。

断念して、かえりかけた時、自動車の音がして、杏子は、とつぜんその皎々^{こうたう}たるヘッドライトにつかまって、マゴマゴしてしまった。

砂利の軋む音がした。車はとまった。扉を排して、降りたのは白哲^{はくせき}長身の美男子だつた。あらッと思うまに、彼は門の中に消えていた。

門札には、春海龍彦と書いてあつた。杏子は今さらのように、いかにも、人気俳優の住居らしい堂々たる構えに眼をみはつた。映画は好きだけれど、その好きな映画

も、ちかごろではほとんど見ていない。実際それだけの御小遣の捻出は容易ではなかった。だが、春海龍彦が或る映画雑誌の人氣投票で第一位をとったくらいことは、杏子だって知っていた。もうすっかり暮れてしまった藍色の闇のなかで彼女は、狼狽しちよッと顔がほてるような気がした。なぜ顔が赤くなったのか、自分でもわからなかった。

彼女はそのまま引ッかえした。せっかく足まめに探し廻ったにも拘らず、映画俳優の春海龍彦の住所を偶然知ったくらいのもので、肝心の小包の差出人の方は、依然、謎の霧のなかに閉ざされたままだ。つまり熊野熊吉なる人物は、デタラメの住所を書いたという結論しか得られなかったのである。

もう、こうなれば、小包を返送する方法もなく、やっぱり階下の小母さん同様に、まさに、天から、貧しき郵便局員糸賀杏子に下くだだしおかれたXマスプレゼントだらいにこじつけて、アツサリ戴おいてしまうより道はない。彼女はもうどうにも、これ以上、好奇心を抑えつけておくわけにはいかなかった。

彼女はとうとう、それを開けてみた……

2

降誕祭もすぎ、お正月もすぎ、真冬の寒い乾燥した日が続いた。すずかけの並木に季節風が鳴っていた。

糸賀杏子は、ちびた下駄をはいて、凍てついた道を——五年間通いなれた道を、一日も欠勤しなかったその道を——せっせと郵便局へ通っていた。寒風で磨かれた彼女の双おもて頬は、いよいよ紅味を増していった。

彼女の青春は単調で平凡であった。彼女はこのお正月で二十二になった。おタキ小母さんの二階に間借りして五年間の明け暮れ——（おタキ小母さんが、小母さんだつて決して生活が楽なはずもないのに、間代の値上げを要求しないのは、どんなに有難いことか——）でも、杏子が、間借りしてから、一ぺんも畳たたみがえをしたことはない。縁ふちもすりきれ、洪茶色に焦やけてしまった畳——それと同じに、自分の青春も、古ぼけていくのだと思うと、ちよッと気になることもあった。

事務はテキパキ、誰に対しても誠実と愛嬌をもつて明るく接する——容貌は十人並み——すこし鼻の恰好が円ますぎるけれど、——家庭の事情で郷里信州の女学校を中

途退学、——ピンポンの名手——彼女のカットは甚だ激烈で、相手の男子局員を、完全にいなしてしまふ——同僚から、あるいはそれとなく、あるいはアケスケに誘惑されてもついで、それに乗ったことはない。——いいな、うけがあるせいだとの憶測も局内で言われているが、真偽のほどは不明——

これが、局内における糸賀杏子の、だいたい輪廓である。

いいなづけは無い。夢はある、——結婚をも含んで将来の生活設計についての青春の夢が……それはまア娘であつてみれば、あたりまえのことだろう。

べつに、ツンとしてお高くとまっているわけではないが、同じ屋根の下で、気軽るにあるいはネンぱり強くウインクを送つてよこす男子局員もいるけれど、どれも、軽薄すぎて、頼りないから、いやだ。

同じ屋根の下と云えば、(話は少々ちがうが)これは局内のことではなく、彼女の借りている二階と同じ屋根つづきの隣りの家(つまり二軒一つ屋根の長屋であるが)、その二階に居る、これもやっぱり間借人の黒鴉寒三郎という妙な男から、二階の軒づたいに、杏子はラブレターを貰つたことがある。

去年の晩秋の頃だつた。——隣りの二階の寒三郎氏が、

杏子の留守に屋根瓦を踏んでやってきて、杏子の部屋の障子のスキマから、こっそり投げ入れたものにちがひなかった。

まるで、アカシヤの枯葉みたいに紛れこんできたその手紙を、杏子は、ラブレターとも思わずに、あけてみた。ちよつと胸打つ美文だつた。

手紙の終りに、岡本かの子の歌がかきそえてあつた。

——山川のあらし流れのふちにして、いのち静けく咲く花のあり。

なんとという失礼な——頭がカーツとしてきて、頬が火照り、読み終ると、いっしょに、それを破りかけたが、結局、破りはしなかつた。もみくしゃにただけであつた。

「いのち静けく咲く花のあり」——彼女はもみくしゃにした手紙のしわを伸ばし、もう一度読みかえた。しみじみとした思いが胸底から沁みふくらんでくる。「いのち静けく咲く花」というのは自分を指しているのだろうか。彼女はあんまり静かでもない胸さわぎの胸にその手紙を押しつけている自分に気がついて、たまらなく恥しくなつた。

彼女はむろん返事は出さなかつた。

黒鴉寒三郎という妙な人物——、お互いに屋根つづき

の、つまり壁ひとつ隔てた隣合せに住んでいても、杏子の方は、ほとんど何も、彼については知らなかった。おタキ小母さんの話によると（彼女だって、ろくに知らないのだが）、寒三郎氏はどこからか復員してきたポツダム中尉だということだ。

「ポツダム中尉って、なあに？」

と訊くと、おタキ小母さんは、それは、いよいよポツダム宣言を受諾して終戦となり、軍籍を脱する間際になつて少尉から中尉に進級したんで、ポツダム中尉って云うのさ、と杏子の知らない新知識をひけらかしたことがあつた。

ポツダム中尉は、応召する前は、洋画家であつたらしいことも、おタキ小母さんの口から聞いた。

でも、絵なんか描いてるところは、まるで見かけたこととはなない。まだ復員後間もなくだし、絵筆なんかとる気分になれないのかも知れないと思つた。なにしろ、このポツダム中尉は、ずいぶんナマケモノらしかつた。なんにもせず寝てる時間のほうが多いようにも見えた。出勤時間の早い杏子が、隣の二階の雨戸のあいてるのを見かけることのできなかつたのは、やむを得ないとしても、夕方局から彼女が退けてきても、まだ黒鴉寒三郎の部屋は戸が閉めきつたままであることも珍しくなかつ

た。外出したきり、三日も四日も帰つて来ないことも度々で、杏子ばかりでなく、隣の貸主のお上さんからして、このポツダム中尉が部屋を空っぽにして、どこで遊びまわっているのか、見当がつかないふうであつた。

たぶん、杏子の公休日であつたらう——珍しく隣りの二階の窓が開いているのを見かけたことがあつた。

寒三郎氏の顔は、その窓には見えなかつたが、その代り、彼の足首が二本ニュツと窓かまちの上のつかつてゐるのが見受けられた。大きい、ばんびろな、うす汚い足裏——杏子は、あきれた。その日は晴天で陽当りもいいので、そのポカポカした陽溜りのなかで、ポツダム中尉は、窓ぎわに寝ころんで、足を窓框まどがまちにつけて、小説本でも読んでゐるらしい、足の置かれた状態からして、そう判断するよりほかなかつた。

寒三郎氏と顔を見合せる機会は少なかつたにしても、まるで、彼の様子恰好を知らなかつたわけではない。——いつだつたか外出姿のポツダム中尉を見かけたことがある。隣家の庇ひさしを出た途端、彼は、ふり仰いで二階の杏子を見あげた。そのとき、ちょうど彼女は、軒下に洗濯物を干していた。まだ、その頃は、ラブレターを受けとつてはいなかつたが、彼と彼女の視線が、当然ぶつかつた。ポツダム中尉は見上げながら笑つた。たいへん好

意的な微笑——しかし、彼女はハッと、アワテフタメキ、そのままの硬^{こわ}ばった表情を返したにすぎない。

ラブレターを貰^{もら}ってからは、なおさら微笑の顔などを
見せるわけにはいかなかった。

黒鴉寒三郎は、いつも、（彼女が見かけたときは）黒のスキー帽をかぶり、垂れを下ろして、顎でくくり、（きつと、南方の熱帯地で軍隊生活をしていたので、日本の気候が寒すぎるせいであろうか——だってスキーの季節には、なっていないなかったもの）、ひどく寒がりらしい様子をして、それに紫がかった遮光眼鏡をかけていた。そんなぐあいだから、ポツダム中尉の裸の顔を見る機会は、まったくなかったのである。

顔よりも、杏子は、彼の足裏の、いつだったか、窓わくにのつかっていたあの薄汚い大きな足裏の表情のほうを、ハッキリ印象づけられているのだから可笑しな話である。

顔よりも足裏のほうがハッキリしてるような人から手紙をもらったからって、杏子としては返事のしようもないわけだ。

それから五六回も顔を見合せたらうか——相変らずスキー帽に遮光眼鏡というイデタチなので、素顔を見さだめることは依然としてできなかった。

新年になってから、どこへ雲がくれたものか、姿を見せなかった。引越したのかしらと思っていたら、そうでもないらしく、せんだつては、二階の雨戸が半分ばかりあいていて、カムカム・エヴリボディの歌をうたっている声が聞えていた……

夜半から、急に気温が下ったと思ったら翌朝、起きてみたらあたりは眩^{くら}ゆいばかりの銀世界、何かしら、新鮮な爽やかな気持で杏子は雪道を踏んで出勤した。

すずかけの並木路を、昂然と胸を張って凛烈たる朝の冷気に、赤らんだ頬をかがやかしながら杏子は歩いていた。彼女は、郵便局の女事務員風情^{ふうせい}には、いささか、ふさわしからぬ立派な靴を履いていた。この靴のおかげで、今朝の雪道を少しも恐れる必要がなかった。靴でなく、下駄であつたら、ここまでくるにだって、相当難儀したことだろう。すずかけの立木に下駄をぶつつけて、くつついた雪の塊を落さなければならなかったに違いない。そうして、裸木の枝にもつた雪もいっしょに振り落してその雪片が襟元へ入りこんだりして、ゾクツと冷やっこい思いもしたに違いない。

平底だけれども、チョコレート色の上等な革で、いかにも女性的情緒を湛^たえたスマートな靴、——それでいて、どんなに乱暴に履いても、容易に型のくずれそうもない

強靱な靴、……

むこうから、珍しく(まったく珍しい。——彼でもこんなに早く起きるのであるうか、——あるいは昨晩、どこか、変な所へでも泊り込んで、今その帰りののであるうか)ポツダム中尉、すなわち黒鴉寒三郎氏のやつてくると、すずかけの並木通りで、バッタリ会ってしまったのである。

杏子は、あわてずにと思いながらも、やつぱりあわてた。逃げるように軽く目礼しただけで、通り抜けようとする、寒三郎氏は、いち早く、彼女の足もとに目をつけて(これほどの靴だもの、誰だつて目をつけるのが当然かも知れない)「寒いですね、——オヤ(と仰山に、たまげた恰好をして見せ)新品のチャキチャキつて靴を履いていますね——ほう」と目を見る様子をした。

「あらッ——お早うございます」

と、なんだか、ピントの合わない挨拶をして、彼女は、一散に駆けぬけてしまった。ハッハッと白い息を吐きながら……

自分の靴が、あんまり真新しく上等なので、どこかで、万引きでもしてきたような後めたい気さえした。

これは、こないだの小包のなかに入っていた靴である。見も知らぬ熊野熊吉からの贈物——熊吉を、サンタ・ク

ロースと、強いて都合よく解釈して、彼女はそのプレゼントを受け入れることに腹を決めたのである。——それを、彼女は二三日前から履きだしたので。当分履かずにいるつもりであったが、あの通勤用のペシヤンコの下駄もとうとう寿命がきた恰好で、鼻緒もきれてしまったし、新しいのを買うのには小遣が乏しいし、とどのつまり、サンタ・クロースの好意に甘えるよりほかなかった。(サンタ・クロースのことなんか、黒鴉寒三郎などに話しても、はじまらない)

そう思った途端、どうした弾みか、熊野熊吉は、春海龍彦の変名じゃないかしら、という考えがフツと彼女の脳裡を掠めた。

(だつて、そんな考え——てんで理窟にもなんにも合いやしないじゃないの——あの今を時めく人気俳優が、なんだつて私に?)

3

「あらッ——どうしようかしら」

杏子は、またしても、大まごつきに間誤つてしまつた。

靴の贈物があつて、一ヶ月ほどして、またもや、熊野熊吉から小包が届いたのである。

やっぱりこの小包を受付けた局は、前回同様、自分の勤めている局ではあつたが、その係りでない杏子は、どんな人物が、それを持つて窓口に現れたか、つい見のがしてしまつた。

小包掛りの堀口さんは、こんどこそ、シツかと、相手の人態を見届けたらしい口吻で、杏子に報告した。

「さつ、さつ、たる美男子——いや、嘘なんかいうもんか、ホントウだよ、——なんで睨むんだい、睨みたいのは、こつちのほうだよ」

冗談ばツかし、という目つきで、杏子は堀口さんを睨んだが、睨みながらも、わざと洒々しゃあしゃあと、

「映画俳優みたいじゃなかつた？」と訊かずにいられたかつた。

「イヤに、しつこいね——そんな根ほり葉ほり聞かれると、こつちが瘦せちまうよ——」

と堀口さんは笑いながら、

「そういえば、映画俳優そっくりだつた——素顔だから、ハッキリとは云えないけれど、ひよつとしたら、あれは春海龍彦かも知れないぜ——」

杏子は、ほんやりしてしまつた。眼からも鼻からも火

花がでそんな息ぐるしさであつた。

（だつて、そんなことが、あるもんか、熊野熊吉が春海龍彦だなんて、そんなことが……）

家へ帰つてから、杏子は、ブルブル慄える手で、小包をひらいてみた。

中には、ポプリンの布地が三ヤールほど入つていて、その間に手紙が挟んであつた。

——せんだつての靴はお気に召したでしょうか——と、いうぐあいには始つて、

——こんどは、いささか押しつけがましい次第ですが、僕自身へのプレゼントを一つ、お願いしたいんです。

（まア——私から熊吉氏へ贈物だつて？……）

彼女は、胸をトキめかしつつ、読み続ける。

——このポプリン地で、これは僕が、やつとのことで、手に入れた品ですが、ワイシャツを一つ作つてくれませんか、仕立屋に頼めばいいなんて云わないで下さい。僕は変に気の利きすぎたそこら辺の専門家の仕立てはどうも気のいらんたちなのです。貴女の誠実で素朴な手によつて作られるワイシャツは幸なるかな、それは、おそらく世界的定評のあるアメリカのアロー（矢印）のワイシャツよりも、もっと僕にはぴつたりするものになるような気がするんです。僕の寸法は別紙のとおり、どうぞよ

ろしく——

手紙は、この程度の簡単なものであった。だが、そのなかに含まれている、抵抗しがたい押しの大さき！——なんて、まあ身勝手な注文なんだろう。

小包みを返送するにしても相手の所在はぜんぜん不明——それに、あんな立派なチョコレート色の靴を贈られた義理もある。(靴はすでに泥をつけてしまったし、今さら返すわけにもいかないのだから) その手前、やつぱり、この注文は引き受けねばならない。

アローのワイシャツ以上のなんて、——(第一、そんな矢印のワイシャツなんて彼女は見たこともない) 彼女は、ポプリンの生地を膝の上に置いたまま、今にも泣きだしそうな顔をした。

むろん、アローには及びもつかないが、ワイシャツの形をしてるぐらいのものは、なんとか、杏子にも作れることは作れる。——女学校を中退してから、しばらくの間洋裁の稽古に通ったこともあるので、まんざら心得のないこともない……

いくら熊野熊吉氏にしても、ぜんぜん心得のない者にワイシャツをつくれなんて、無鉄砲な注文を出さないはずだし……とすると、彼は、そのへんのことまで、委しく杏子の身辺を調べ上げているのであろうか——杏子は、

ますます薄気味悪くなってきた。

それにしても、注文主の住所が、まるッきり判らないのに、でき上った注成品を、どうして先方に届けたらいいんだらうと、杏子はこの奇妙な手紙を読みながら、思ったことであるが、——その方法が、ちゃんと抜目なく、二伸として末尾に書き添えてある。

曰く——、出来上りましたら、貴嬢のお部屋の出窓の所に、つりさげておいて下さい。僕は忙しい勤めの身ですが、時々貴嬢のお宅の前を散歩することがあります。窓のシャツが目についたら、さっそくお伺いして、ただいて行くことにいたします。お礼はその節にまた——と云ったようなくあいなのである。

幸い、階下のおタキ小母さんの部屋には小母さんの亡くなった長女の形見だとかいうので、まだ手離さずに、ミシンが一台置いてあった。

さア、大変なことになった。彼女のハリキリ方は、よそ目にも、いじらしい位であった。

夜の目もねないで——その形容は、文字どおり彼女のそうした熱意に燃えた姿をさながらに示していた。

不思議と愛情が湧いてくる。いや、どこの誰とも知れぬ注文主に対してなんかではなく、刻々にでき上ってゆくシャツそのものに対して——でも、そのうちに、これ

もやっぱり不思議な現象の一つであるが、彼女の魂をこめて作るそのシャツに注ぐ愛情が、いつとはなしに、それを着るであろう注文主への愛情に移行してゆくような妖しい気持ちにもなってくるのであった。

とにかく出来た。

満足というまではいかなかったけれど、どうやら、まあアという程度には出来上ったつもりである。

よく晴れた朝であった。霜が真白におりていたが、まもなく春がくる気配が、明るく澄みきった陽の光のなかに、かすかながらも感じられた。

杏子は、なんととはなしに、いそいそとした気持ちに胸をふくらませながら、出来上ったワイシャツを二階の出窓に吊した。少し後ずさりして、それを眺めた。紺碧の空に浮かんだそれは、なかなか効果的であった。純白のポプリン地に、朝日が映えて、遠くからでも、ハッキリ目につくにちがいない。

なにかしら、冒險的な、すがすがしい気分——そうだ、冒險にちがいない、出窓にシャツを吊したものの、さて、それからどんな風に發展するのか、空恐しいような、楽しいような期待である。

——彼女は、そのまま出勤した。

佗しい空虚な人生——そんな言葉を、彼女だって、時

には眩いてみることもあったがこの頃、たいへん違う——いつの間にか貧しい孤独な娘の生活が日一日と光沢をおびてくるような感じであった。

——その日、退勤時間がくると、杏子は飛ぶようにして帰宅した。

シャツは二階の出窓から消えていた。暮れ残る夕空のなかに、ただ洋服掛けの影絵だけが黒々と浮いていた。

おタキ小母さんに聞いても訪問客はなかった、と云う。シャツは、風にでも吹きとばされたのではないか、

——そうとしか考えられないじゃないか、と小母さんは云ったが、今日はとりわけ静かであった。シャツを飛ばす風など吹いたおぼえはない……

4

翌日は彼女の公休日であった。彼女はふさぎこんでいた。

二階の出窓につるしたシャツを長い竿かなんかで、ちよろりと引ッかけて盗み去ることだって、この頃の險悪な世相では、必ずしも無いとは云い切れない。どこの誰ともわからぬ人だが、とにかく、注文主たる熊野熊吉氏

には合わせる顔がない。

彼女は弁償するつもりで、貰ったばかりの月給全部を持って、ポプリンの生地をどこかで見つける決心で出掛けた。どこの店にあるものやら、ずいぶん心細いわけだがしかし、凝^じッとしてはいられない。

いつものすずかけの並木道までくると、後から大股に歩いてくる足音がして、例のポツダム中尉黒鴉寒三郎から、とつぜん呼び留められた。

「いい天気ですね——もう、春もすぐですよ」

と笑顔で近づいてくる、ポツダム中尉。

ふりかえった杏子の眼に、いきなり入ったのは彼のシャツであった。自分が丹精をこめて作ったシャツだけに、見間違はずはない。あのポプリンのワイシャツを晴れがましくも着込んでいる彼！

「お礼を云わなきゃならないと思つて急いで追っかけて来たんですよ。きのう、二階の屋根づたいにシャツをいただいたんですが、それについて……」

「だって、あれは——」

あきれはてた杏子には言葉も出ないほどであった。

「白状しちゃいます——僕は三つ名前があるんですよ。一人三役でわけですね。黒鴉寒三郎に、熊野熊吉、それから春海龍彦、——」

そう云いながら、彼は、深々とかぶったスキー帽を脱ぎ、それから遮光眼鏡を外し、さらに鼻下の無精ひげそのままに見える附けひげ（とは、その時はじめてわかつたのであるが）を取りのけると、春海龍彦その人にほかならなかつた。

俳優のメエキヤップは、お手のものであるとは云え、杏子はただ眼を見るばかりであった。

「僕はね、杏子さん——人気稼業の虚名と煩わしさにしみじみ愛想がつきた男の一人なんです。空しい人気を商売政策の荒浪に翻弄されて、自分自身の生活なんかどこにも見当らないんです。ファンとか、パトロンとかいう有象無象に取りまかれ、その連中の気持をそらさないように、年中見てくればかり気にしてる生活には、僕もすっかり厭気がさしてきました——時には、騒々しい群衆の追跡からのがれて、ユツクリ寝ころびたくもなるじゃありませんか——それで——」

春海龍彦と郵便局の女事務員糸賀杏子とは、すずかけの並木かげを、肩をならべて歩きだした。龍彦はさらにつづける。

「それで、僕は、時々そこに身を隠しては、何ものにも、さまたげられずに、ゆつくり寝ころべる部屋を、つまり、あなたの隣りの二階に探し当てたというわけなん

です。地のままの春海龍彦じゃすぐ見つかってしまうんで、ちょっとそのへんは適当に迷彩をほどこして、黒鴉寒三郎になりすましていたんです。

それからね、杏子さん、——僕は、取りまきの女連中の誠実味のない騒々しさにも辟易へいえきしていたんですよ、それにくらべると杏子さんは、——」

杏子は、穴にでも入りたいほど恥しかったが、しかし、すがすがしい清水のようなものにふれた感じでもあった。

「すくなくとも杏子さんは、彼女たちとはずいぶんちがつている——地味で着実で、そうして明るい。——山川のあらし流れのふちにして、いのち静けく咲く花のあり——僕はその花にすツかり魅惑されてしまつたんです」

「あんまり買いかぶられると困つちまうわ——ちつとも静けく咲く花でなんかないんですもの——これで、ずいぶんお転婆てんぱなのよ」

夢に夢みる心地——しかし彼女は、ようやく落ち着きをとり戻しつゝあつた。

「貴女が、あなたらしくおてんばだから、なおいいんですよ——ピンポンなんか、相当なもんだと聞いていますよ——僕も少こしはやりませよ」

「そのうち、お相手しますわ」

つれだつて歩いてるうちに、杏子は、フトそんな言葉さえ、気軽にでるようになった。

二人の行く手——すずかけの並木路のむこうには、雪をいただいた富士の麗姿が冴えざえと天空に浮かんでいた。

紫水晶アメシストの女

1

しだいに、暮色が、ブナや樺かほの林の奥から、ひろがりだしてきた。

山の稜線の裏側に落ちこんだ夕陽の姿は見えなかったけれど、空の裾は、焰の海さながらな朱色に照り映えて山のシルエットはいっそう黒々と、ホテルの窓におしつぶさってくるように見えた。

香代は、いつもよりも少し長湯をしたかしら、と思いつながら、ホテルの浴室を出た。疎開当初からしばらくの間、この高原のホテルで小さな部屋を借りて暮らしていた関係で、宿の人たちとも、しごく懇意になり、香代が、近所に一戸を借りて移り住んでからも、ときどき、このホテルに貰い湯にくるのである。自家で風呂を焚くのは

面倒くさくもあり、それにホテルは温泉の内湯であったから、これに入りつけると、こたえられなかった。

それも冬の間はいくらか億劫おんこうであった。高原の寒気は、帰りの濡れたタオルを、氷柱つららみたいにしてしまうと、湯ざめの恐れもあったが、今は、もう春だから、湯上りの肌を夕ぐれの外気にさらしながら雑木林のなかの道を帰ってくるのは、むしろ心もちがよかった。

芽ぐみはじめた林のなかは春の匂いで一杯だった。香代は若い牝鹿めしかのように、その中の道を歩くのが好きだった。

疎開したては、ただもうやたらに、東京に帰りがり、周囲の風物の美しさは、いたずらに寂寥せきりょうをかきたてるばかりであったが、この頃では、いくらかアキラメもでき、たとえ都内転入が可能だとしても、結局、気詰りな間借りぐらししかできない自分たちだと思つと、今のところ、田舎いんかずまいの方がむしろ気楽だと、夫の良作も云うようになり、香代自身もそう考えるようになった。

夫は、終戦後、ここから二里ばかり離れた発電所の技師として勤めるようになり、帰宅はたいてい七時頃、時には八時をすぎることもあった。だから、香代は、ゆつくりホテルの温泉につかっしてから夕飯の支度にとりかかっても充分間にあつた。

編者解題

小松史生子

渡辺啓助の戦後小説を集中的に採録した『ネメクモア』が東京創元社から刊行されたのは二〇〇一（平成十三年一月のことであるから、顧みれば今（二〇一九〔令和元〕年）からおよそ二十年近い昔ということになる。当時『ネメクモア』は、それまで『新青年』系の作家として戦前の作品ばかりが言及されがちだった渡辺啓助の、戦後における創作動向を改めて調査し、その作品に見出される面白さや独自の視点を読書界に広く訴える意図で企画されたもので、まだ学生あがりの気分抜けやらぬ若輩だった当方は懸命にこの仕事に取り組んだ。幸運にも作家ご本人が存命で「鴉の会」というサロンを、息女の画廊で開催されている頃で、私はそこにご厚意で出入りさせていただき、直接間接に様々なお話をうかがうことができた。『ネメクモア』はそうした経緯で生まれ、戦

後の探偵小説動向を見る資料群としても貴重であると自負しているが、刊行当初の読書界での反応は、未だに渡辺啓助を「偽眼のマドンナ」や「地獄横丁」を代表作とする戦前作家とみなす視線が強くて、たしか東京創元社が書評をお願いした故久世光彦氏の文章も、戦後作品収録という重要な本書の企画にはほとんど触れておらず、ただ戦前作家を懐かしむ調子のものであったと記憶している。「書評を頂いたのは光栄だが、久世さん、『ネメクモア』の中身をほとんど読んでいないにちがいない。ご自分の記憶だけで書いているな」と、少し落胆したこと

を懐かしく思い出す。

それから二十年近い歳月を経て、今回は論創社から改めて渡辺啓助の長い創作活動の全容をまとめる企画が起きて、二巻構成のうちⅡ巻が戦後作品に充てられ、再び

当方に解説の仕事が回ってきた事態に、心から嬉しく、また感謝の思いを抱くものである。この二十年間で探偵小説研究はもはや文学史の傍流で片付けられていたような時代を脱し、未だ幾ばくかの偏見は残存してはいるものの、アカデミズムにおける文学研究の組上にも堂々と登場するようになった。江戸川乱歩はもちろん、夢野久作、横溝正史、久生十蘭、小栗虫太郎、山田風太郎といった作家を対象にした、若手の研究者も陸続と現れてきている。新しい世代の読者や研究者が育ちつつある現況で、それでは渡辺啓助はどのような捉え方をされているのだろうか？

戦後の渡辺啓助の動向が探偵小説研究にとって重要なのは、次の幾つかの理由に基づく。

①戦前・戦時下・戦後・現代と時代の節目を跨いで、探偵小説界がその都度重要な時局面とどのように対峙してきたかを目撃した生き証人であること。

②一九五七（昭和三二）年に〈おめがクラブ〉のリーダーとして科学小説機関誌「科学小説」を創刊、また一九六〇（昭和三五）年には「探偵作家クラブ」第四代会長に就任するなど、戦後の探偵小説界とSF小説界の橋渡しとなる役目を果たしたこと。

③一九五九（昭和三四）年「素人ラジオ探偵局」（NHKラジオ）に原作を提供したことを機縁に、以後、ラジオドラマの領域でも活躍。ラジオと探偵小説の蜜月を牽引したこと。

④一九七五（昭和五〇）年の『幻影城』創刊を受けて、桃源社の〈大ロマンの復活〉シリーズの一冊として『地獄横丁』が刊行され、出版界および読書界に戦前探偵小説再評価ブームが起きたこと。

この他にも、一九二五（大正十四）年に英語教師として赴任して以来の所縁の地である群馬県渋川で、地元有志達と同人誌『B』を創刊し地方の文芸活動へ貢献したことや、書道と絵画の方面にも意欲的に踏み込み、一九七三（昭和四八）年渋谷で初の個展を開催して以降、コンスタントに個展を開き続け、高輪に画廊ギャラリー・オキュルスをオープンさせたことなどが挙げられる。総じて、戦後の渡辺啓助の活動の軌跡は、探偵小説作家という存在が決して狭い井戸の中の蛙の如きものではなく、実にバリエーション豊かな、幅の広い活躍の場を有していた事実を証してくれるものであるといえよう。

それではI巻の解題にならう体裁で、以下、収録作品に基づきながら、右記の戦後動向のポイントと絡めて解

〔著者〕 渡辺啓助（わたなべ・けいすけ）

1901年、秋田県生まれ。本名・圭介（けいすけ）。九州帝国大学法文学部史学科在学中の29年、実弟の温とともに江戸川乱歩名義でE・A・ポーの短編を翻訳し、映画俳優のゴーストライターとして「偽眼（いれめ）のマドンナ」を執筆する。卒業後は教員を務めながら創作活動を行い、37年より専業作家となった。42年、陸軍報道部の従軍記者として大陸に派遣され、その時の体験を基にした小説「オールドスの鷹」などが三期続けて直木賞候補に挙げられた。戦後は作家グループのまとめ役として日本探偵作家クラブ（現・日本推理作家協会）会長を務め、SF同人グループ〈おめがクラブ〉の創立にも尽力。書画や詩作なども積極的に手掛けており、80年には文芸サークル「鴉の会」を立ち上げた。2002年逝去。

〔編者〕 小松史生子（こまつ・しょうこ）

1972年、東京都生まれ。金城学院大学文学部日本語日本文化学科教授。専攻は日本近代文学。著書に『乱歩と名古屋—地方都市モダニズムと探偵小説原風景』、『東海の異才・奇人列伝』（ともに風媒社）、『探偵小説のペルソナ—奇想と異常心理の言語態』（双文社出版）があるほか、共著や監修書も多数。

〔巻末エッセイ〕 渡辺 東（わたなべ・あずま）

渡辺啓助の四女。単行本の装画や雑誌の挿絵など画家として活躍し、画廊「ギャラリー・オキュルス」のオーナーも務める。

わたなべけいすけたんていしょうせつせん
渡辺啓助探偵小説選Ⅱ

〔論創ミステリ叢書 120〕

2019年6月30日 初版第1刷印刷

2019年7月7日 初版第1刷発行

著者 渡辺啓助

編者 小松史生子

装訂 栗原裕孝

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

<http://www.ronso.co.jp/>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

©2019 Keisuke Watanabe, Printed in Japan

ISBN978-4-8460-1806-1